対談② 地域と学生をつなぐ ジモ×ガク

近年、学生地域定着事業「ジモ×ガク」に参加し地域と関わる大学生も増えてきている。学生はどのような影響を受けているのか。関係者が語る。

―「ジモ×ガク」が始まって4年。学生にどんな変化が見られましたか

深瀬　いろいろなイベントを通じて学生さんと関わっていますが、間違いなく地元に対する気持ちというのは上がってきていると思います。

ジモ×ガクに参加するだけでも地元に対する気持ちを感じられますしね。

藤本　私が情報大学に赴任した6年前、情報大学では、山田君も所属していたボランティア部が大麻銀座商店街のお手伝いをするなど、地域との関わりが多少見受けられたのですが、他の3大学は立地もあって、アルバイトをする場所も、遊ぶ場所も、やっぱり札幌に向いていたような気がします。

4大学で学生1万人とはいうものの、大半は札幌や周辺の市町村から通っています。

その中で、江別を全然知らない、4年間通っていても、飲み会を野幌で2、3回やったことあるという程度で終わってしまうのがせいぜいです。

そんな学生たちが、ジモ×ガクがスタートしたことで地域の事に関われるチャンスがすごく増えてきて、「関わってみたら楽しい」とか「熱い人がいる、すごく面白い」と感じているようです。

関わり方の密度には個人差があるでしょうけれども、江別や周辺の市町村を知らなかったという学生が、たとえば長沼町の夕やけ市の活動や、赤平や芦別のインターンシップに参加したり、観光施策の検証事業なんかに関わらせてもらって、その地域の取り組みや資源に関する認識を深めています。

今まで大学生が関わる機会や、知るチャンスが全くなかったので、そういうきっかけがジモ×ガクという地方創生のプログラムを通して準備できたというのが大きいと思います。

上／由仁町むかで競争に参加したジモ×ガクチーム
左下／栗山児童センターで、夏休み中の小学生と交流
右下／長沼町夕やけ市に参加した学生。笑顔で飲食物を販売

山田　最近ボランティアに参加したのですが、参加者が多く、そこに集まった人たちが、それぞれのやりたい内容にすごくマッチしていることに驚きました。

江別の学生が江別でやりたいことができるという入口ができて良かったなと思います。

竹田　自分は4大学の出身ですが、学生のときはボランティアをあまり意識していなかったんです。当時と比べると、今は学生さんが、積極的に参加してくれているなと感じます。

当たり前にボランティアに参加できる環境が整ってきているということではないでしょうか。

また、学生さんも、漫然と参加しているだけではなく、「自分の成長や学びにしたい」という考えの方が増えてきているのかなと思います。

ジモ×ガクの参加者も年々増えているので、今後地元に就職する人も増えていくのではないでしょうか。

深瀬　石川組も若い人が年々入ってきているので、今後も途切れずに入って欲しいです。

竹田　そういう意味でも、地域に目を向けてくれる学生さんが増えてきているなと感じます。

荒木　自分は高校の先生の勧めで大学に入りましたが、4年生まで何をしようか決めていなくて。そういうときに山田さんがキャリアサポート授業で「江別で建設の仕事をします」と話されたのを聞いて、そういう会社が地元にあるんだと初めて知って、そこから就職しようと決めました。

―江別に就職する良さや魅力は

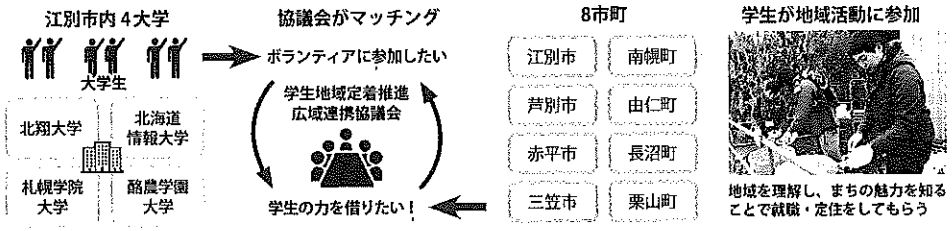
山田　家賃などの物価も安いですし、スーパーも多くて生活には困らないなと思います。娯楽という面では札幌にはかないませんけど。

あと、個人的には、地域に対して熱量をもっている人が多いというのが魅力でした。大学1年目にジモ×ガク関係者の方の働きを見ていて、自分も手伝いたいなというふうに思いました。

「この人のために頑張りたい」と思える人が、江別にはたくさんいたな、と思います。そこが自分にとって一番魅力に感じた部分でした。

一方で、気になるというと、少し違うのかも知れないですけど、寂しがり屋のお年寄りが多いなという印象もあります。

深瀬　お年寄りと若者のコミュニティが絡み合っていけたら良いのかもね。

藤本　今後もジモ×ガクを継続していくとしたら、高齢者を中心としたボランティアなども、企画してみたら良いかもしれませんね。

大学生が地域・地元で学び、活躍する「学生地域定着事業」通称 ジモ×ガク はこんな取り組み！